俳諧十論

始

特別
〜5
6625
1

藤野潔氏遺愛之記
明治四十年四月廿四日
藤野漸氏寄贈

俳諧十論　附序

東華坊述

あゝ武江の芭蕉庵にて、茶話禅とて、緑とあゝて、吾家のひとあり、我宗の風雅をひろむと、文を論語の述而にあゝいねい維ゝ
の向疾にあゝて、此十論をなすなり、義
へ例のゆゝ、抜て今や世間の俳諧をなるに
其のなほ本の為なるゝ、きゝ人のちゝをもて
対ぜんとゝ、一ゝに我が俳諧を、文好冬扁
をゝゝく例のおゝく、義和をよの

世にあやまりひとの人のかたりまつるあるものの
おこがましいれをとりあつまるものあり。我ら人とそしりを
かうむりて人にあつまれるむねを世にたくむこと実あれど
口金の言とおそれより。梓にのぼせたるなりき
けだし此論をもて名を春秋の道にかけ庵の道行
うるとあるべきやいかれを世の言いこと今にいたる
あり実滅ありとや此論ありや私ありんまいふく
こ神の真意とかもしれの可雅と世に伝ふ
へりもし例に此諧の虛実ふ〳〵例に文章の適當
ちる論に物ふ一く論に怪る事

第一 此諧傳

抑も此諧の伝とてふ〳〵此史記に滑稽の
名ありて齊楚の比より秦漢の間にて七八人此
言行をもつて太史云。天道の賛詞より或は笑言
とのて大道にかかるもし求れば談笑とのて諫諍とも
滑稽は酒掬の喻ちるよし姚氏は此諧のこと〳〵
晁竟は屋漏の自在ちる。言語にあてふのいひあん
ちれば此諧のたくるやかより虛実の誹ふんうへこそ
こ皇の帝より番湯文武に伝りて毛右司馬遷

ら史記よりちくさりぬと云ふ一説に太極のうとさら
て儒仏老荘のむうらう虚を実とうてたくはふ
へく実を虚とうてたくへくそれくそれに荘周ありて
仁義とうとき釈氏を達磨ありて仏論とやゆる
いつれも俳諧の機変なりけん俳諧なり儒仏と
やうけくたりて詩歌の媒とよしーちいやゆる我
まん天の浮橋よけんと仰くく伊弉諾伊弉冊の鶺鴒の
喻より天照御神とうけ仏おひく虚実の向に
ろとひあむして猿田彦いと姿おうく天鈿女を
さたさんー言に風雅の俳優とされちんそうり

八ちのいろくに雅俗はのうちいて言とあるうて浅香山
の詞ともに虚とあつふ万葉ちはしてをたちあるう
誹諧のうたちたう集にたしたりてたれより和歌の
一流ちとふりぬたちと俳諧と誹諧と音訓の論
ありて八ちに仏和ちも二ちんとあきられ二条次泉の音仏
遠ちに山風流をふぬるうわうきーて法式ちも新四の
差ふ口伝あれい芭蕉家の書けちん人偏の俳諧を
用ーーと白馬に家訓の一條ーーちあるちたて文明の比
ちんん心俗の宗猫法師をそせ誹諧のうあるうり
守武堅一もたれとそのひて百翁とたるとうとうる

貞性貞宗と京匠のゐありて世俗の言語を
作こへられ〳〵貞宗やゝ世俗のことを論
隅田川のゑに作て句い和そ〻の姿ほとかゝる人も
今の風雅の根さ〻やいうじたのち雅俗のふ因へ
武蔵に檀林の額うちて俗語の涅槃(ネハン)見い作りうれと
耳に言語のおゝ〻とゆゝ眼に姿ほのさゝ〻さを
ちれいそしてたに〻こたはあ〻といむこたるよゆい
こ作ゐ〻こ作ゐんうたの中ゐいあ〻に寔(ケニ)たよ
るゑの俗語とふを今様の人の新にしゐをして奇
ふゝ連言ゐる人も一たの句泉にいひ拾て俗語の

ひとゐる人あれも俗語のゐと作ゐる作ゐ〻おろゝや
ゐ〻ふ俗階をこたるゝ。唐虞のえにもられてこゐい
齊楚の後にあ〻れこ風を和漢の一那とゐりね
況やこゐるにこ法とゆゝそ世ほとあつふ教〻ゐい
清稽のゐを高義に作りて菩亟相の樹とゆけ
て作僧の禅とゆゝ〻ゆひゝも法然上人の言に
あひく善ゐ寺の法とゆのり拾ひ〻ゐも古徳の
碑に自己の眼とひ〻きて風新の心ゐを人ゆけうん
言を天ゐうけたよて自悟とも自證ともふへを
世ふふ。誹諧をいさ〻に俗階より芭蕉庵

と云祖としてあり

傳曰以一段之説貫之

より子孫万代の説あれども帰する所虛実の

二あるに今や説法の一段として虛実をあつ

仲之とする輩の一言より論ずれば説と

説宜の二字あるべしと云へり説と

誹諧の字論ずる古今集にも數尾文字誹諧

とよむ一説也類とする説と云へり

やうに歩歩文字誹諧と訓ずべし他門より

論ずべきなり馬のせ十二法とはいかなる

と云の口伝とはいかなる事ぞ

こゝに拙僧の童蒙なる一生涯仕官とあるべき

洛の学問と俳諧とをあるひは埋木と書なして

朱点を加へる抽二冊ありて俳を實文の中に

ちん連句の新式を歌集より俳諧ならべ

頭書に朱点を加へ或は百人一首の秘おあり

或は古今の序俳あり命名は孔子七人

の門あるごとくきるとしてはなるべしとて

俳諧とは何ぞと問へば答て天和の初ゑん

武江の深川に隠遁して古池や蛙飛こむ水の音

とつて面白の一句に自己の眼をひらきそこに俳諧
の一ちをひらきまりきるに至る俳諧の別伝と
論とい史記の滑稽伝より人と伝へて古今集の名
をひろむへきと今ハ俳諧と謝諧とにちがく
新奮のなとをとりて天稟の一ちと建立し
双丁引笠の八九とひらきまた和漢の一二と
あらはしくるよみ章自在の論といふへしもるに
中古の俳諧師をかのくちをかりて上ちり
負笈と称ちをしまた旬ハ今の世に讃ちて
そもくとはうしのめるかも

いさのわれ浪風の動くひに沉る
俳やけ二句の姿情とわそ今の俳諧の根さとする
爰に風雅の私なくんるを爰に新旧の差ふと
信ちて一蓋いつむけ張の中伝をるに馬鹿の
才子伝と云ふ

才二俳諧道

おも俳諧の名ちいかもを手一ち虚実の自在ちる世間
の理屈をとくちをれく風雅の名称ちあれふと也
俳ち俳諧の実活ちる事人ちてはるちんるる和言

緇徒の儀なるゆへに虛實の間よりあたるもの言語
の詞と家とをつくしやうり虛實をたんとうもくあつ
不ゝ言語あるんとやせよいふ俗諦いふ義をの風あり
ゝをつくをとをもとをぬ人のいひもれもく義をの
をゝやんの天遊とをとて要人の仁義と後をれい
世俗の理非をおもけて虛實のをゝにあてをむ
ゝてをゝに俗諦を理非とあつらいく今日の世俗と
あくはむれをゝと虛實の要を化ゝおてをい法と世俗
の和說ゝはをく實と一字孫のおもむれゝて時宜
此一法ををゝもやをれい俗諦のゝをいふ儒仏老莊

の間をはゝひ〳〵虛實ゝ中庸のはありとゝいむ
儒仏のをゝを虛實のをねゝ家をゝけるを俗諦
いをれゝ仲人をゝをゝ一はをゝをはゝ條あり世俗の
人和をゝ倫の常はゝをおゝをさを俗諦のゝをゝ
はひゝをゝ風祈の祈をゝをゝ人をゝけをゝをゝ付を
分ゝ千童の四維孩をかゝをゝ蕗一牧のをひをゝれ
をゝ八珍の菓肴をはゝねをも一瓶の飲のをゝ
をかゝをゝんゝ世俗の要をゝをゝて笑言ゝ耳をあて
むゝ俗諦自在の人をゝ一をゝに和ねの俗諦を
宗徒をゝ宇宙をゝ俗諦の詞いひねゝ

学ばれし仏法のみと仏くらの人なりけれど五義に仏法
と古人なりとてふるのとひてそれに行人ならやまて宗訓
の秘文ともあるをもうかがふに神の清穢を論とへ
むしの仏法をろとてふまへてかの仏法にるとを
ふらといひむ言にあるへに代々の撰集ならけれ所のふね
ふるまてまて仏法のの胴の比喩とやまちひく仏法のの
の風雅品と仰へさらやいてや仏法の法をとは法華陸
あり言にありてあり物の法花とまくはやまいふ
それら雅言と伝法とあるとを例ま庵室の月在ら
例のおうく例のあられに風雅をよ不遠はのまあれへ

やそのの行人竟人甚と風景とかさり言葉とあ
言とはるる法とはれるのといつれも上よのふらあん
名人の場をもるに遠うんまるいふんるる上よとの
はるひいちよを十知の光はるきふいいるの信
あるよ信を万物のふるねるまるいふ天地もを法
変化をれるる面とはるきれとれるる鬼神もを
ま法とこれてむまを月はまよふ沒や仏法
の阜肇る信あるきふ人の庵疑ま義さんや言に
儒仏の内法をはれれふ人をを信ま法とおるあい
上よをを法とひろむはるるの建仏

昨とあり才子あつまりの冥府なん儒宗に乗ゆるみなし
あるも釈門に佛菩薩の面をしてあるもあるに頓漸の
沈ありともえしみちそれ古詩といひ古今といひ
そのふみをさぞくはまらせし△こゝに作ちよみ子はたれ
うたのかくほかにさまかくし、あや詩編をいへは誠にかたき
むかしてもとちくるとさへやむとしそる道の筆のことはりを
おくれると漢魏の比より詩文にあそひて淵明やうやく
風雅のいもとを実をとりし、一万葉に今の口状にひとしく
あるさ艸木の深きをあかりしあるさ男女の情を演る
こゝに祈かぞへてくわして言語にあちゝさるかくさと

人麿をまつりし実に自在なるやかくのこと代々の元祖
とあおてひろむしてうそうし十知の上にあるうしけなに
吾妻ら竹下に十哲の名をそよなへ天下にとく子の徒あれ
とも人にむかへて俳諧をとそれ万たく人の信にまも
怪をまずの功をとてくそて武江の筆にあとなう
●佛頂和尚の禅室にまうりり投子一碗の茶に手語
とはまりて俳諧のたましひを口伝をされるより世間の理屈
●とうくあれ風雅の大理によくあちれく△奥の細道
●より撫の口ひとたくし湖南の幻住庵に山居の△
をかくして杜律の五言を枕とし山家集をたつさえ

て貧困にして常にいつわる玉帛のれい物を腹とおもて
洗濯やく労をつくされ衣食の産業もんとろ
ちて遠きを椎葉の糧と作くし近きを杏仁の酒と
きこのさえ〳〵そなのうれとおもてしいすあり
と源の計り仏移文のうきをもて立一名れ例のさい
く例のたく〳〵仏法をんのあらひちをそむへ
たもやけるの功と論をん儒仏老荘の虚実をあらひ法
連寺の祀とおもてあて国ようさむらにあれい京あるふ
子あるうとき仏法い天下の一助とつ〳〵きれも
仏法の人を宮殿のもちのにそうれ田舎の秋の歴

ようりて立京商店のもつ作ようとかるを汚肆
婦房のあをひをくらるに世界を戒物のるあれも
向上の一路をあやうふをとをくひく人と損をもけるる
ちんくんと益をもけるるちんら学にこへい兵義い
をもくく人を論ることて仏諸ををなのをつをを
ようけ語を我京の貴金をあるおるをの人れせす
過をへをやうをけ意を陽をんにあをけいな道
おなくよ所のあをひやをかんにをく世の人をる
へをををけ仏僧のをいるれいをと虚実の嫌をて
世法の人和ををるを世俗やけるの険阻ちらるあ

〻ん人のまゝ上へ〻てゝ〻ん人のおゝ〻へ〻れい〻れ〻の
金言と世ゝ伝ゝ〻て物の始し孫ととゝ〻い中ゝ人間の
あゝひゝゝてはゝそゝけゝの王地ゝゝすとゝゝ〻へ
傳曰今ゝ〻仙道の一ゝゝゝ氣の動ゝゝて物
ゝ〻屋実の夢あゝゝ或ゝて神農の道ゝと字
或ゝて黄帝の伝ゝとゝ伝ゝてゝゝゝ史記ゝ伝ゝから
ねゝゝと中古の仙道ゝゝいゝゝゝゝと確ゝゝ
今の仙道ゝけゝゝとゝゝゝゝゝゝれゝと例の通書
ふゝゝゝと仙道の頓挫ゝゝゝけゝゝ白馬
訳文とひゝゝゝゝゝゝ大言とひゝゝて耳語ゝ

そゝゝゝ道ゝけ段の玄論ゝゝゝ〻ゝ〻ゝ法ありて
儒ゝ仏ゝゝ実ゝ云ゝゝ伝ゝ仏ゝゝゝ〻ゝゝゝゝゝ
ゝゝて老荘の教ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ中庸
のゝゝゝゝゝ実ゝ仙道の大宗師ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の文章に六義の中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝん風ゝ訳ゝゝゝゝ雅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の撰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
次ゝ投子一流の文章に仙道のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

其ハ二ヒ人間の変ゝ事ちれい其ハ大ゝ事て
虚空の変と事ゝ人を或ハ偏の変と事て
恩愛の間ゝ事と事ハ或ハ偏の虚ゝ事て
慳貪の内ゝ家と事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ
とのゝ事ハ事ハ虚空の句用あるとや
いさや祢家の俳諧ゝ事ハ例ゝ句用の事ハ
言語の世界とゝ事ハ松風蘿月の所を
ゝ事ハ事ハ而ゝ句の附合ハ事ハ今や
投子一碗の茶に俳諧ゝ事ハ事ハ事ハ事ハ
年の非と事ハ事ハ事ハ事ハ

稽山章在投子會下爲栴頭投子一
日與茶乃曰表羅万象捻在這裡許
栴頭倏却茶曰表羅万象在什麼
投子曰可惜一椀茶

表羅万象の中に世界あり
表ゝ句ハ新ゝ事ハ
投子の茶と張て茶碗の中に世界あり
表ゝ句ハ味ハ浸味の処ゝ味
ゝ句ハ味ハ浸味の処ゝ味
ゝ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ
とゝ事て茶と事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ
世ゝ事ハ世ゝ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ

ゆんちうに投ずるまでと失りてあるべき第一の
拒りなくして諸子おのおのの所のろうをおさめ
て。呉中の力とぬくべきに例
所の世祖と仏陀とをりてゆるものの言法をあちふ
べきやうにあらずよ仏陀ちうとしかくして世尊のはらい
ありて孔雀王孔雀とかさねたい国をもちうるに
ゆんとして失ひてむ言とけるのこたへにて仏法の
口伝をいとうやみうるの世をおこちられ慶喜
の間の示節とたくらいて誇法幸子の喩よりも
十年の死地より皮肉とちでゝ十年の法地より耳目

とあてたりうて致知格物の條目よりふひるべはそて
天下の一助をちうるべしちむ若ちるやけ論の決をる不
及ひ一子の信とちるべして法よりをねのきのえをとる
和目よりおをれゝ子ふくゆうちよりなれゝをもちむ
へきをもゝけ仏陀の一ちるちん

才之仏諸德

おもも仏陀の徳としてあちるべ孔雀と比二ちるべ人孔
と拾て天孔よちるかふとふやはて仏陀の徳ちるや文
よやうをき武よりをむはちるを仁勇の二ちして智を

こと推とあり。かねよりも仁勇のひがるとき、これを智ゝと二ありて世智を仁勇とおもふかゝり真智を仁勇とおもふにくむたとへ張良が女児の孤なるに高祖を助けの白馬頭巾を俳諧のたとへ談笑の訓誡といひ俳諧の勇と文章の頑拙といふ智をひさき俳諧の機変と趣るものゝ多うんまうを俳諧の風雅をかゝらうけ連歌をうけ連歌の歌をれい氷のれいもまたしく笑の朱とうハをむしてけちをうゝ家くのこと地うして爲と建立の一門とも我道の風曾ともいふ也ゝ俳諧の一流を立ゝ。けゝ連歌のみかゝ

とゝれけんけれとけ推の基とゝ。しかうして此推とひ訓むるおもを乃ち推とゝ。けゝ命とのけうひうてをれを。けゝくゝ文章あれい文章のもを言語とけりてけれよ言語の書とゝれとゝもけれいゝ乃ち推とゝ乃ち推を全く善うして推とゝ。乃ち推とゝ善と悪ゝ悪ありて推とゝ。ひとゝ悪ゝ悪ありて推とゝ。善悪ゝ善悪の悪のこあんとやとゝれ十分の乃ち推あれとも乃ち文をあしゝ。さゝゝあゝてゝれむに乃ち文とれもむうさるも乃ち推あれい推とゝ。推とゝよゝくゝもゝ乃ち推あんゝくゝに。とゝれゝ乃ち推とやげて乃ち文とゝ。ゝ文とゝゝゝ乃ち

及びの悪ちゃ拙なれども言に及びのセやうに付きたちまち
ほ屋とあれることもちんこと言ふたに水と氷とのごとくおなじ
世間の諺にも及びの剛もてるを非の一信とつるもてるを
言語の虚実とまちまちなれども人とあむさ
もてなれを表なも詞とやりけて面白ふ人といさふ
つひまちまちとふたて人間の霊あり恐れいるほの天
もて及屋のそとへよ人あんるとけれやせばどやりけ
て徳の涵養とをつへきやそとるほとほ家の
ちひを訴状を及屋よりたまれく奉り頭人もと
ちくそてあくを徘徊をるほよりまちれく大ろ云家

おりとをおのさちちたる言語の慣意ちり。ろよ文章
あるのいひやたしく。清稗の記をるおれ楚の優孟
ら本樵の辛とたくそ〜秦の優旃ら婢とめんいひ
淳于髡を鵠とわ〜れと不信の辨ちやりおて祿
とそまり東方朔を酒とめとも近今の及と
たくて首とそれた。張儀蘇秦ちやりも
王家といさち敵国とやりけて文武るとこ
ろ。栄ちを文章ち客難賓戯の俳諧
とちひ戦国を弁ち利害とけ周秦の間さ
て要宋齊梁の中比り西唐の清代の盛ちえ明

の今にいたるまで史書に見えたる文武の人をいつれも
仁勇の智とかれをもて風雅の体にたとへ(こゝや曹操)
い詩にあたらひて百別の歌をちひけ美運を文とし
十八賢の人をあつまるまつりごとの天ちとそれの
人ちるはちひとり世にあり和あるをもちる
角一般諸ちと頼樹の機鋒あつて武家の餘力
ちと学ぶ人をもて諸に儒仏の万善もこゝろの性
とひとしむとてあつたを虛といひ空ちといひあるを行
ようたちとこゝにちとて人のんつさあるをよみ事の
感仰ちゝはちゝやまつて俗諸の行とかゝへてちゝ上

ひろちゝんちちとこゝにたつてこゝにたつてみるよ適當
とあくまれく儒はこゝよの徒とあつけかくこゝ人ちて
モ勇ちちゝ付ちゝ詩ちの風流ちゝ叩ちゝれく仏家
八葉の要とちひけわつこゝ智ちこゝろの性格ちゝ
俗諸に対に機変の法ちれく今くけこの性とかゝへて
はちて今日の文章にあちこゝ一ちちて世ちゝふ言語の
を敷ちて世ちゝ多能の人と俗ちし和とちゝ付ち
こゝ人ひとこゝ人ひとちゝ付ちこゝ人ちあちゝ世語ち
仏家の密法ちて調の鼓舞ちちけちゝや美ち俗諸
の行路雖ありちふとしかちふとちゝ上ちとちゝ人ちの

ちひさうてくらおとなひ屋の静かなるにおうかるる
いろ花の動さうたさてやらちりぬると芭蕉下北
子なれども万代敬下の風雅人ありてさもさ俳諧
俳諧とかやらのあるあらしうるかるの一語とや
そうしてさやうもくいひちらしたるさみを論れいきふ
へ師よりちりきふそれあるとを上よりちりて西
湖南北の酒屋とちうえいかんと秋門の雅懐
おいつむとうたちうふ耳子のくいろ和とは屋の
故ちうえいふつおとかとうるふとの一歩より里の大とと
さんやはうたおそうつきて山一部ちんれとやうは

と和屋とに善悪のことをうるとを儒仏西つの八よ義も
尼庵一ろのこ万言ちいかとうるふちうと俳諧の
世ちうを賢のこ万とはうくはけそ秋のこ言
うたしふちうそとを世ちよ用れたくくとの文とやうけ
てりあるよあうたうし。倫のうとやうたうそと俳諧よ
用れい附句と附句とのあ活とちうてぬうちうおふ
俳諧ふれうし一子一點のよ不はうり垂仕とたくく
新ちんうそうそ。それの陰晴ようひうと人の喜怒
とあつふかもや世情の附句よけれの所ひちうん
うそみも武も端よ及ようてちうくけれの天新さひ

て今日の世情とあはせふんと有性の師匠にて一さきあり
ちりや仰書の應接接物も老拙の和光同塵も論語にいふ
愛敬親仁も畢竟を世情の人和にして和温厚
の二ともいふべきにいはれもて宗の一節にして一雙なの
眼力とはいふべき〜ちれてそなたいはゆるを性へ
文をもてかやうにして武をうんやうして武をうんや
文をうんや武を天下の治見ふれたもかまくも我い
の子為達を第一に俳諧のろと性とをあはせ第二に
俳諧の法と式とをとふまへてろろを五老と居さるを
ひろく性を活ぜんとをもてこうろ敬ふて

こうろ慎こ稀と虛して和と実あり八南者のもに
そなはれく世事の翠のおろ〜ちも戸ぶの面にあれ
て測のろ徒のされ〜ちも例こ條のはあんこ哀乐
の間こ世法とちをもて俳諧こ誹木諫鼓の用とをこ
俳ぶ一段を貴節して理屈のちひとり
世情の温和こ性とにしてしるを我こ宗師て
をこ俳諧のの沈とおもを一一弟こ宗の家にをれて
又偏のおれ親疎あれに和歌こおちれる歌こかいて
ぶすの理論とこのむ人あんにそと教訓の誡あ〜
物こ勝負の公事こやうひとらく一ぶ偏の親切と

之を始とし物理の二書より中ごろ清談の人とあげて
て理と虚実の論ふとあり孫子例の世にあり
人和と強弱の力とをもくして智仁勇のことを言ふ孫子
そもそも論語の和同礼節をもて使ふ一節あり古人や
是ならや此論を白馬の遺訓と伝へくして我とも
はなをもく人ひとへへ和ともちるはなをもくとあるを
そと仰ぎ遊戯自在なる仙家の洞に地行仙とも
はれと禁庭の陰あるとそなる史記に清談の隨一
とも東方朔が俳諧の詞にて言ふ俳諧の語
ふとと信ぜ一一ふんなやけ論をおもふ法を

違ふに歌しねるを法を違ふにもて教言慎の
二子に虚実とそなるそなる俳諧の家風より
天下の人は名聞と坐ひもてしるを虚実の言伝と
いひ誹木蘭鼓の用あるとをく彼を信のこまり
世にふ徒の一なにもをこ中ごりをうけ世祖の
あるはをこをもをこれるはをこ風のもをことと
ふはれを徒言もをもをうう常を俳諧の
酒屋より相下石上の陰れとありて富もの人と謂ふ
へをを権威のをを人をををを一をを大業の一粒
をれをもをれをもて世をれをを人をを誤ん

や・情をかれらに伝へ来りて伝へ来りしの用
こいやしまとする論語に稍とたゝかの節とたゝへ
論の青節をもて人らくけりより他話又人一盞子
如之事と測ぬの一對を例と錯綜のたるゝ事を
伝へ虚堂の頌とあるやうに返理の術あるべし

才心虚実論

たゝし他説の虚実とを例と言語の設ちらりを
と伝附の兩翼をもてたれら変化とちらうちもて
ちられを虚と実とやゝ〳〵ゆきこちらを虚と補ふ

それのゝこゝろかゝしくあんんせうふ儒書を実子
仏教を虚説ちらと云人て・勸懲の先後とこゝやへ
て詳端の虚実と虚とをもて実とをもてこゝ他とこゝ
虚とあり如とゝろふ世其の実とをちくのいひやら
釈するを馬麦のむこひこゝろ・孔子を半ク世ちられ
とあるこれを虚実の説文ちゝとやこゝ他いに華
と要とをもて南惟顕実とをもてこゝ他いて素い論語と
鑑とをもて世必世固とちゝ・他方い実とをもて
方便のいとひゝさ所方を虚とをもて仏家の関とやの
れとこれを儒仏のこゝ言をもて書を他の奥義

あるもの世ようの違言を言はずして他宗の雷頭なり
と云人も例の変化七宗なれば口ずから和尚と名乗るべし
あらずんば和尚と称へて其宗の法にとらへて教家
と禅家と此二宗のこと他宗を違言をもとなむ
ことなるべしやもうると或物ゆえ言ことを和尚
いと云ことなりと云ことは自己の宗のことを指
して世間にいれたるものなるべしいてや世間
なるべしの者共男女の中とやりけるものなるべ
きもいとやうなるべきなるべし
（云云）雷頭あくびをして他宗の雷頭なり

和尚の雷頭なんとして右に引用の業とそ云へる
百人一首の歌なるべし天竺の仏教の繋し地続の仏教も
宗よりおのおのとかあるべしなるべし
宗に一宗のみとむべし山と晒とかとて一宗なるべし
と申して六義に雷宗の中あるべしと云へしけれ
五宗を他宗とて申すべしなるべし
ようなるべしと例を他宗の端的にて雷宗の自在
の人とて知るべきさ蕉門下の一振りあるべし
雷宗とて申すべしあれば雷宗の雷宗なるべし
と他宗のみを此一天とすべし一向乃至ぬ所の

人も虚言をかまへて相違の無きを
あれとせよと虚しからんをもとこれ
も虚を世をつ。されば化をおこすこと
をもんのわくと
をもむ徒らに論を虚しく物をふて
言をもみ偏をもふつむをもて言を
言をいふ物を虚をもれ婦姑のあらそいやもしこれ
言に虚言の事を論をもん言をもて好悪の二をかをもく
虚をもをもちゆくの事をあらそいをもいふ偏のをもて
いつむを言をもて忠をのかに似れをもなのかに言の耳に
ちひをの。をりのんをあるをものをもをもをわをあ

人を他国をゆふて天の恩をむをを秋をふをありて父の
名をををれををををををををををををををををををを
金ををれるをちひのをををあををれをく育をを恨のを祈を
いををを言のををあをを以二に道をん作を虚をふ
をを虚言をあをて言を真ををを遊人の故言をあをん
加をゆをを伝人の誘言をあをを言を文を言を言を秋の人
ををを武をを言を略の法をををいれを机を同をを記
をを里のをの立面をを文雅を同ををん思神を
をを作ををを武器をを猛ををを面をいをむを虚
言を怒の事をあをを典をおのをを

虛とおこちゝいたれと言ふ説とゝつもけれ
言語ゝ虛實の自在とゝ利害の實とゝ
形しかゝ虛實の大小と傳ゝ虛とおもいつて實
ちいさゝ中ゝ針のちいさゝ中ゝ針のおもいつて
うゝるゝ中ゝ弦あふゝ針とおゝれさんやくあれゝ
とゝるゝ莊周も例のけ形とおもゝるゝ以て虛
實のかゝちゝちゝ仙ゝ虛とゝ中ゝ天地陽
あゝゝ實ゝねゝ中ゝ君臣父子ありゝと大小の論とゝ
いゝんゝと失ねの雜とやいゝむせゝゝ實のりゝ
ゝ虛の説ゝかゝんゝ言と虛實の虛實ゝ中ゝ生の

天地ゝゝ遊やゝゝかの地獄ゝゝ入かゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ生ゝねありゝゝ和ゝ孤孫ありゝ生ゝゝ
とゝゝれいゝ虛の老ゝんゝゝゝの張ゝん
ゝゝゝ仏説ゝ我宗の讖文ゝ言ゝ新安の朱
子ゝ大学の序と看仏と言ゝ儒佛の内訣と
ゝる面ゝ仏説ゝ長ゝ虛ゝ虛ゝ言ゝ
實ゝゝ虛ゝあゝふゝゝゝゝゝ白馬の法の才一義
ゝゝ人のゝゝゝゝ大学の綱領ゝゝゝゝ
ゝ書ゝれゝの遺誡ゝゝ明性の明ゝ虛實と
新民の新ゝ實化とゝゝゝ虛實の二法

より変化とまるまちまちなれども今はまづ虚実の先後
を論ずべし虚とは存ずる人を是非とするに故元来の性をつ
ゝ耳とあるべきものを釈迦とまぎれて金石
のちがひに分とはなすべきなれども彼を仏にして実ふ
化義に好悪の要あるとまぎれ虚とは存ずも
実とは存ずも例と両翼の用あれば虚実の先後なる
ふべきにあらず虚の立論とて主へ仏を以て
虚実の仏をかくもゆきちがひあんずべきあり
て居の子とをあむに彼は虚とは存ずるにそなはち
実とあり我は実とは存ずるに虚とあるむ

ちまちまちなるのおこりやすくこゝ虚のたつるさかゝるなり
あり我れ〳〵に自在とおもふ存ずるもむし
ろ二庵居士の遺言も願くは世の所有と割して所異
とも実とも〳〵に立てる異意を虚実の立論
て虚実の虚実も仏ずるも人を仏語と存ずる仏
起居とまぎれ意をとゞまるべし
傳曰此一論を仏説ともかゝれむしろ陣の力
とたゝて儒者を仰ぐかちとおもひ仏教を
儒書とまぎれ今ふ儒法も虚実
あれば仏法も虚実ありてあらはふ人〻子面

とそのいく言語の表裡とをわくるに爲(て)
謗や虛實の說うるを迂誕の眞言といふの論
眞言の迂誕とをふすありてをとを唯佛与佛と
爲る眼眼の佛よりうけられいに佛をあらいかとふ
人もあんをるにを虛の爲うんを實の爲あん
とを祖師の論者を動して誘を失語をしあ
あれいかの牛刀の戲を詞を表裡のをうひありて例の
實地よりをいうを人をうを實と讖文のに佛といい
爲すやい論の說ゆを虛實を再得して周の一字
とをるををを般若の六百卷をを智の一字より說

ひれるををんこれをの叮嚀をを遺をる(て)況や孔夫子
の遺書をひをを庵居士を遺言をありをを言に儒
とをを佛とをを(て)虛實をを論を證をんを
爲(て)蓋つむ此論を事表牛刀の字對をを
法華を論語の西方文をありをを文武をを虛の
喜怒ををけををん針船の喻ををを(て)故臣
生をを意對の所爲をんを(て)大字の內題を
的彩の二字に注ををとをを(て)佛語の氣の云表
をををこれをを大事胎換骨の代を(て)言に
我門の文章ありをを(て)

第五姿情論

夫も俳諧の風姿風情ともに云も殊に古今の差あれども
古風は耳に聞を守て言語の上の姿をもとしたまへき
今様は目に見て姿を見て言語の外の情を含むされば
古は情のうへにして今は姿の論すまる一ト格に情ある
姿なるらんや世俗の言葉まで姿あれバとて格まる
あらそひとて語る同じ姿とまふ侍らん言語の姿の見
ところにおいても上の風と雅とをまづ見ては世まで
未男本守まで姿情の論はまた及ハ侍らん今の風言雅語

の妙所は俳諧独の一大事なるべきやおもく姿情の論
と論をなす人は天地の姿にむかしより伝来て天と地と府にして
地といふより三才の姿は伝さまらず天地人の性にて
人あれば人と姿のはなれずして月星と化して
天の姿といひ草木を化して地の姿といふ古今文此
秘訣も言なまん事ハ姿の先に先して情とはなると
法も一ツとして君臣父子とても情は天地の間
にこもりて姿は忠と孝とにあらはるいさや其情は
姿の情にかくれてあるものなるをくみわくべし今は
姿の論といふも弾上岩文の志なり甲冑と黒帯まれ

いたりてふつう公衆と供養とれば孝性あらつる世人
あつて拵たえあつて論とこれ又のごの姿とくらし
めれ霧て拵くおもなの拵とたくて一さや姿のえちる
と論をるれ及ぶてけれ仏の拵ゐも五逆の姿を
地獄とえ拵けて鉄の門と鉄羅刹とたちへ十善の
姿と拵ゐくえ拵けて玉のすがに笠菓とかさる
けると儒仏のあくそれよ姿ゐ拵たけとあんに地獄
拵ゐの姿を迂詐あんと迂詐とさらへて迂詐と
疑つるたれと祥詐ゐて繁駢擬とそりむとう
仏拵ゐ方後あれい儒書ゐも二面あるんや言と言ゐ

の姿ゐとゐるもおゐや中古の祇諧を双ふふ世の
歳且とゐ月ゐしと詞とむとひ表四のきゐて
拵ゐく敬と拵けるとれゐへ拵のゐて風ゐを風ゐ
いゐるゐるゐるあん諧や今の祇諧とゐて古祇の
諧と姿とえ拵ゐて拵ゐを全くゐゐた仏れれ
ゐを風拵とゐの中に言ゐる風祇の餅拵ゐけいけも
けるゐを祇諧のゐあんんや世くの拵ゐけ姿ゐるとちね
い中古の廉子とやいゐむ美に連祇の姿拵を論と
月むとゐけむ古今一拵ゐて拵ゐけいゐゐく連祇
もおゐ一姿ゐを拵ゐ連祇とてゐれくちゐた拵けて

よ差あり候くと申けれども一方にあるそなりそれとも
連俗をおろ〳〵ゆけども多くは歌と本体に
次第かつて俗言連語の論ずるなり古人世うた
連言の抜をもて俗語の姿といひもして俗言とい
ふと雅言とを区別せんとて古きをとりて用ゆる
いさらに新しきを捨れや新たへ時の附会よりて指の
変化と考へきもれをもて姿をあらひく
連歌を考へて俗語をありて情句と
いひもし人と海の端的のおちん言と俗語の附会と論
をいはれよ句の姿をとんく句の情をゆるに堅を

けれと吾輩を耳をもて俗語とナ一〇〇に用ゆるを俗
とふる一一とふる耳用ゆる姿情の性をひもて論ず
いの情のいちひあれへもいちれと言語の姿をいちの
人もあるへそれとあらそ一〇とて両袖をもちて首
とちあらはるとて肌をわかて膝をもち
そとトの姿をとるをあらとをもて助詞の要も
おれ一字一点より所会の姿をルかりゆけへりあるし
俗語とふるも古とてあるのあるへきやけれと温故知新
の学ふりの今の俗語の作ふるとまこと一史記の後林
ふる言れらと賛ふ一て或た敏捷の要ふ一てその言い

詞を失なひて或は好のみをしてしんとあるべき
耳をおとゝ仮なるべきもまた言語の形容より
文字の麁妙をとるべきなんいさや我乃の俗語俗
字をもて新古をとゝのへ色新古を言語の間に
まぎれありとまぎらはして言ふ儒仏神儒をあつうひ
そ語ふ詩ふ雪月花ふ俗語を言語の媒
も新古の説ともきゝ人さも
傳ひけ篇を分て俗語の論ふ天地ふ文の生れ
ふり君臣父子の説ふ儒仏ふ文字の説と
あらをいく異を連俗の説をもとゝのふる

況や言語の説ふり耳目ふ情の差ふをこゝろ
ふあむ〳〵ふ文ふこゝろやうに物ふ叮嚀の信あり
人と偽〳〵傳ふをもつて人ふ情ふ世ふ世の説
をもつてふを温故知新のまことをもて俗語の示の
所の説〳〵ふをふる中ふをふに耳をかたむけ人ふ
ふに服をもとゝ蓋いむ古文の秘訣ふ篋蓋の
詞ふやいまゝふもて結説の傳伝神ふをもて説ふ
連奇ふ詞ふる神ふを説ふの詞をおこなひ
拙おもねのはふ〳〵ふまをもてこ様をふ〳〵む
そもゝみ文字の一格〳〵ふ〳〵

第六俗諦地

たゝ俗諦の地とてあるを孩のごとき幸地といひ傍地
ごとき下地といひて今様の汎地と地とあり
節とてあり曲をこゝ中の善きあんなもく儒仏
の大乗も勸善懲悪と地形として仁義礼智に
王道の儀式とたゝあへ殺盗婬妄に地獄の刑おと
ひたるけれど仏の説法も世界の耳とおとなし
七宝の華厳をこゝ七日にして何の曲もなく節も
あき阿含十二年の骨折ありれど擬請弾陋

の小教の次第と感じて一ひとつ論説としてあれの
法家の文章にてくれるに人とあつて論法のおく
やうに助語ゝんとぬくくれたけれども要人のあと
決して虚実の節としてあれども七章も過ぎん
ひとへに節のあるんも所詮の風言ふに接構を
あさんして例の第あるも俗諦也節をあくの骨
うて一を建立の大ごとうとて知一一今やはといひ
言といひいつれもこれと応ずして主のあるくにて
あんもしても俗諦の地としてあるを法法を
きれど雅俗のひいとをうを例に虚実のあつひ

より例に風雅のたゞしきあるといふは今の世の媚に媚
とかされてそれへ俳諧の席ならずともたゞるなれども道の
まじはりはよきぞ人なるんやあしきぞ人なるんや世うは
急行の諷諭え●骨おる不及にこを地うつて秘まる不
き節なりやしたつては節の面白きをそて好ら拙き
なまかくむき色とやくよむやたまて教ふまじき
説経えに自然とこそはまかたへるといふに俳諧の所下
ちるや奇人達者の家となつへて恥へてそれきそしけ
すも今まゝ遠国の俳諧とそはけん作まくの葉を
習ひあるなてはなれら中の言と学ひはく地とらふわく

時よなつかしきそれちてあるらくしとなへし俳諧は
ほねよりもちらく捨てむ史記よりふ●和歌よりは行て
馬よ心経の喩ある一しと見て●六藝の文なあらんも
それと癖とえてふつまれ人の学ぶもこれも癖也夷に
人間の地と論とは明きらに飯くは茶とのたて居交め
おのれとうたれは男女中の交とそうへまかして
月雪花なとくおれの風雅の情とうつしてもとめれと
これをてふて及ばんたれと四時の佳節あつて節供
正月を調とあへことや気嫁入嫁取の賑ひなりおは
深更の模様もたねよりてたなやうは人に對さう

詞はひのもとう媚うるもんめくかんちゃれの俳諧も
世話とうるれて物の節〳〵て儀式をもって芸伝
正月のこ物あ〳〵まりて・撥ぶまりて時うるく天下
の人よ笑をれいをのうちまくよ曲節とはうをひとり
俳諧の地をもうねを地のうる低よ自在ふれい一字
一言よ金玉のあり〳〵て好るのうの耳目とおもう
ちらむやはられをうをにうるも学のふくうを地い
十年の孫貴あるんに彼ふくくの俳諧を論とい一天の
絹ともうをへて天下の紺屋よ雅とはけて雅歌
とはうあるくよ俳うんけ地を俳うるい・まをんと

ひ儒はうるを慣心とはうるれも・をのふうしてんよ
ゆうはうをあるをおせかあるをよ和はの俳諧師い俳諧い
何のあるうや天をはをあはけ父を子にあるを
夫を妻よむうひえうを弟とをしてかるるを三のこ
ひをうん俳諧をはうるるをて今日の用の放埒ちゃん
をを神をはうひ人をもうをはねよ人間の地をふ
るををうを命
傳四は一篇を人間の常をしてうれのうふは地を
ゆやはうんはねよ・奇人連章に第をして自はの
放埒をあけををう俳諧よ一篇の球勝はあるす

と信ずへし譬に華厳阿含の三教よりて地とも覚え
なあらしても孟子に蔵経の次第をいはふり論語は
出でたる助辞をもちてゆれもその霊字もかゝから
さる例の儒仏にあたりされ例の文章にまやうなく
もとやまると論語の隠便なるよりこれを地に一節の
ちからを保ちる譬へば行の一脈にして家と客易
に看過すべくも書に是豆とかゝふのあれあつむ
渉難にも一節をとちらん驪龍頷下のひかりを
たくして汚れる人間の地に優婆へたとや蓋ふ
君父と男女と此一宗ちそれ友の三ツよとめて昆弟

明なの文偏と言ふるえと雖文関の文けいと云ふ也

第七 修行地

おも仏道の修行とをすちるをあしく尻るもむし
より儒仏の学者も修行は先へ向ふはしと云ふて
ことはりしかしこととあれとゝもから諦を翻しられて
ある霊労の覩人とありあらゆまにそもとらる此
媚人とあるよりして仏道の霊閑なる曠野に弱き
これなあしてこちらさけいてくだまのみそとゝれしさそ
邪見とかられのないをいふさんのほ孫のかつてかつてあん徒輩や

和漢の人はなべて伊呂波とふるい丘乙己とおぼゆれど
庭訓をうつし三月きりまて生とて文選の句をかれ
古文真寶を強のはの沖よ詩のうれんらこ綿も
ひろうて茶の湯もおぼしてけてくいそとおんの
猿のそまもたくあくく人とうのうて一藝もあるていえて
えうて況や俳諧を和歌分からに和歌所の式はあく
もし里村家の指もまくたれの法国とのうろことを
て言もゆきて書籍目録と指うて乗る
も起るもりるて廿年ユまの俳諧をうけ史記
の俳諧くふ拾うあて世ふふ唐人の言葉
ちらへ

れもく儒仏の法文も四書五経ちうこうも指う
同未悟ともすうそのて先へゆけとうへあうに
そううとあて（唐れとのうひもあふうこうあうくく
い拙う五七のまねとあうひて義句の拙まも附合は弁
も作へ宮とかくのうくきくひとかくのてくくと例の
仰をえうひく。もねとうよへしけて俳諧の世ちるとう
きれい俳諧を作ねのねぬとみ七五七くの句ばうう
て紙もふふれい人もいひきれかもうりあうもも乗れ
い百日の功と面されとも廿年ユまの俳諧ちりも今様の
変化をてあやうふん変に老俳の真俳と称さあうも

例之俳りの為ニ[illegible]ひより親にたゞびるるとよりて
息子をあゞ[illegible]さとよといひむ孫子世代の情愛を
ありふるつゝれも俳諧の雅言とまつれい例の石[illegible]と
[illegible]とにまゝひく[illegible]さらも[illegible]とよりとかりとこふ
[illegible]しいさとよ[illegible]の俳諧師をよびて廿年の功と
[illegible]ニ[illegible]ニ[illegible]ニ[illegible]俳諧の眼をひらふて媚[illegible]人情の病
[illegible]俳諧を手[illegible]の調よありて[illegible]偏の人と
[illegible]の[illegible]ニ七技の[illegible]とやらけて俳[illegible]今日の世[illegible]
[illegible]とゝ[illegible]の[illegible]此[illegible]も[illegible]く十年のゝとあとゝ
[illegible]れいおよ貴おりてん[illegible]ものゝ[illegible]の[illegible]

四[illegible]の風[illegible]も[illegible]るの風情も麦苗田植の[illegible]
[illegible]を[illegible]面の時[illegible]りて檜の[illegible]貴のおり[illegible]も秋を
[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]店の[illegible]貴のさり[illegible]ちも[illegible]ちの
遊女を緞子にかゝりて[illegible]おさまるゝ[illegible]
田舎の治郎を[illegible]ものひく[illegible]鹿[illegible]
ある武士の[illegible]も[illegible]人立の[illegible]も世界[illegible]
[illegible]皆[illegible]ものゝ[illegible]て[illegible]俳諧の[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]と[illegible]心和[illegible]も[illegible]諧[illegible]嚙[illegible]
[illegible]人の[illegible]秘[illegible]を我家の俳諧[illegible]
[illegible]ゝて[illegible]ゝて[illegible]ゝて[illegible]ゝて[illegible]

ありけるこのあるさに宗匠の追剥ありて殺されぬ
却子の子孫とかのあるべし才こそを韵子の祖父と
なりぬ古今のこそるの伝授とゆんこととにこそて
ひろやまられをおろろろ人を信んとおこうて昔々
今孫をも剥ぎれ言語道断あけうたはぬ也
されば祖父地の源氏とうたて十年往く付いこそるを
人代々十年還る付いこそをと知代くてをとする
そをの馬車ひけるこれをなる付て七年の
功を作るこそる祖父の上よりいつへこそ也言に祖父の
知ることを知ると論とと七年のちよい論も及ぶて七年

のこそと百日のこそとこそ物をおあり柿下にあそいく
馬こそこそ大名こそおのひ車こそ云ふとあるべく。祖父の
こそ百の撲おこそりて或を新勅のこそいこそから或を
祖折の附合こそちひく程くこと。附合の要化あんに
上こそをこそりてこそをとこそをこそ下こそふあこそく
こそるにこそふ徒をこそ十年の姫こそ花こそ物を
こそあこそこそあこそこそこそこそ十年の姫こそ物を
の物をこそこそこそこそと明暗のこそこそを遥こそこそも
をこそふおこそあこそこそこそこそ言に上こそのこそに祖下こそ
の上こそ祖こそるこそと言こそこそこそこそ宗の訓信こそ

唐ものゝ組にて肩とりかくて紙帳の俗伝を引て
仕くも選ぶもおろかなり　乃紙ちりに落りて故里の
郷閭よりあてなきうらやこの一子を媚うるの書うんと爾の頭
枕木をさして呼ちく我門ゝ入ぬるゝに
俗口は一段をたのの拍子かりて例は紙帳のうち格
より次の浦のわよに帳とあげるの林の言葉
よ者とぶらとて今様の竹琴も似られと
実に雅俗の大てすありて十段の中此変化と
全篇を世間おゝ　あ角て眼おの紙帳と知
て七尋八負のちまといまゝ　ちる古人も言に

帰去来とも帰家隠坐とも云をり今は論者
の一字録らを作らく新家の紙帳い字力引に
雑口もよりもて全く俗伝を話の中より計言の
同流とんこまらゝ世法の一とと世ゝ何為
とゝ今の暁とちゝり時宜の一灯とかけむ
とるたれゝに此論の新地と記さんや　言おゝふけ
一篇を十論の中の双ぜにてよ言まの芝変とし
ゝ中ゝもあらぬの駒の形容より芝生かゝれの古言
といおてんの一字にいひよせそゝるこれゝと頭詞の文
格ゝてをれよりかな里の石節ゝいる冬とかゝ

春秋とあるは明時夕暮と照あひ対の
あるひは哀弔と云れるを合て土曲辰之高
とありて言に隠見の文法とたくゝ言に互照の
文格をたくゝ況や字句の対類をたくるをと
仮借の文法といはんやあるゝ仕方の上と
ともに百れの器用者と形容して古文に
あるをもとゝ称くゝやるをもて上よりの下よりに仰くく
下よりの上よりに仰くくを馬之一條の訓言ある
とゝ云もくく仮借のよるゝてふを同に差周文法
とやるひくゝをとゝ解牛の姿と字句に韓愈

う理論とこのあひだくゝを獲麟の性とたくゝて
意を儒仰の中庸よあてゝむとゝしれる仮借
い例のおうゝく例のさひくく例之世法の一節と
されとゝをもゝられを文言のゝゝ不句ゝて
長短之叶へゝるんやゝのゝて音声と対をたんや
ゝゝを仮ゝをの真ゝとゝるゝむに一字のそひ
もゝるゝんゝをもあゝゝを色わゝゝを四六の文法あるより
言人連言仰のゝ言ゝゝてゝゝられゝをゝられゝ仮借
の訓詞ゝを顔之木顔のゝゝあゝゝも雲霧て
孔と拘をやゝとゝ孔をゝゝと不根の持論と注ゝて

十論上　七二

たれも言語の姿とたれも中人の感深もいとつよ
はりて傳佛の歎呵うを仰されもれたることを不審とも
不實ともいとこてと談笑の訓誡うして過當を
例の麁實ゝはよりの麁ゝ諫よりけ篇のようをを
佛をと天下の仏階佛と言よるうを行婢ふとうる
ちりも尚あやうに孤人とらひ婦人とらひ上よりしよ
とにこの品をとりけて四民の姿をたとたくうをん
世ゝ仏階のよ章をやうあひいをうけ一篇ゝ
遠ねをへ